

聖書：使徒の働き 2章 14～24節

説教：主の名を呼ぶ者は、みな救われる

あらすじ

十字架で死んでくださってから三日後によみがえられた主は、四十日間弟子たちにそのお姿を現されました。そのとき主が言われたことばはこうでした。「エルサレムを離れないで、わたしから聞いた父の約束を待ちなさい。ヨハネは水でバプテスマを授けたが、もう間もなく、あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるからです。」

そして主は天に上げられていき、姿が見えなくなりました。弟子たちはエルサレムにとどまり、ほかの兄弟たちとともに聖霊のバプテスマを待つことにしました。主が十字架にかかられたのが過越の祭りのときでしたが、その日から数えて五十日目、五旬節とも呼ばれる日ですが、ちょうどその日に人々が一つ所に集まっていると天から激しい風が吹いてくるような大きな音が起きました。町の人々が何事かと思つて駆けつけてみると、ガリラヤ出身の田舎者たちが、滑らかなことばで十二カ国語を越える外国語をしゃべっていた。みなびっくりして、いったい何が起きたのかと考えるのですが誰もわからない。中には安い酒でも飲んで酔っているのだらうと言って、強引に説明する者も現れる始末です。

1 ペテロ

1) 十一人とともに立つ

今日はその続きとなります。14節。「そこで、ペテロは十一人とともに立って、声を張り上げ、人々にはっきりとこう言った。」こ

こで、十一人とともに立ったというところに注目していただきたいと思います。ペテロを含めて十二人です。彼らは使徒と呼ばれる特別な役割を担っております。かつてイエスによって特別に選ばれた人たちです。そのなかのユダはイエスを裏切り脱落したので、それを補充するためにマッテヤが選ばれた。そんな十二人が、どうして彼らが今人々の前に立っているのでしょうか。ペテロが1章22節で、「十二人の使徒はイエスの復活の証人とならなければならない」とはっきりと言っておりました。それで今、十二人が立ち、使徒としての使命を果たそうとしているのです。

2) 変えられていくペテロ

読んでおわかりのとおり、彼の態度は非常に堂々としています。ペテロは神学校に行つて訓練を受けた訳でもない。普通の漁師でした。そんな人が聖書のあちこちを開きながら、理路整然と語る。聖霊がくださった場面も驚きですが、ペテロの姿に正直驚きます。驚く理由はもう一つあります。つい五十日前、ペテロは何をしたのですか。イエスが逮捕され、裁判にかけられたとき、彼は急に恐ろしくなつて、「イエスなど知らない」と言つて逃げた。その彼が、いま人々の前でイエスの復活を証しをする。とても同じペテロとは思えない。あまりの変わりようです。人間は短い間にこんなにも変わることができるのか。なぜここまで変わったのでしょうか。ある方は言うでしょう。「ペテロは聖霊を受け、聖霊によって変えられたのです。」もちろんそのと

おりですが、もっと別のこともあるように思っています。それは何か。ペテロのことばからさぐっていきます。

2 ヨエルの預言

1) 霊を注ぐ

16節から21節までのところで、ペテロは預言者ヨエルの引用をしながら説明していきます。彼がここで言おうとしているポイントは二つあります。その一つ目は、17節に示されています。「これは、預言者ヨエルによって語られた事です。『神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言し、青年は幻を見、老人は夢を見る。』」

「ここにいる人たちがいろいろな外国語で語り出したのは、安い酒を飲んで酔ったせいではない。神が聖霊を注いでくださった結果、このようなことが起きたのです。みなさんの知っているヨエル書にこう書いてありますよね。そのことが今起きたのです。」

まとめれば、神は聖霊を注ぐと約束してくださったけれど、そのことが成就したのです。今起きていることは、すでに聖書に書かれている。だから驚くことではない。それがペテロの言いたかったことの一つ目でした。

2) 不思議なわざとするしを示す

続いてペテロはこう言います。19節以降。「また、わたしは、上は天に不思議なわざを示し、下は地にしるしを示す。それは、血と火と立ち上る煙である。主の大いなる輝かしい日が来る前に、太陽はやみとなり、月は血に変わる。」

なんの事かと理解が難しいように思いますが、調べてみるときちんと書いてる。ル

カの福音書23章44～46節。「そのときすでに十二時ごろになっていたが、全地が暗くなって、三時まで続いた。太陽は光を失っていた。また、神殿の幕は真っ二つに避けた。イエスは大声で叫んで言われた。『父よ。わが霊を御手にゆだねます。』こう言って息を引き取られた。」

ヨエルが語った「太陽はやみとなり」とはこのことを指すと言われます。「月は血に変わり」という箇所については聖書には記述はありません。おそらくイエスが十字架で死んだ日の夕方、月が地平線から上って来たとき、血のように赤く染まっていたことを指すのではないかと考えられています。十字架の出来事からまだ五十日しか経過していませんから、エルサレムにいた人々はあのときいろいろと不思議なことが起きたことを鮮明に記憶しています。ペテロが22節で「これは、あなたが自身をご承知のことです」と言っているのはそのことです。

まとめれば、神はヨエルの口を通して、イエスの十字架のことをあらかじめ語っていた。ペテロの言いたかったことの二つ目がこれになります。

3 罪と救い

1) イエス・キリストを十字架で殺した

人々は町中に響き渡るような大きな音がしたので、何事かと駆けつけてみればガリラヤの田舎者たちが外国語をしゃべっていた。初めは、なにが起きたのか理解できなかったのですが、ペテロの口から聞かされたのは、あの十字架の出来事と、今日の前で起きている聖霊の出来事とは全部つながっているということでした。それだけではない。人々は今ももっと意外なことをペテロから聞くことに

なります。

23節。「あなたがたは、神の定めた計画と神の余地とによって引き渡されたこの方を、不法な者の手によって十字架につけて殺しました。」イエスが十字架で処刑されたとき、あの十字架が自分と関係があると思う者はほとんどいなかったでしょう。新興宗教の教祖が革命を起こそうとして失敗して処刑された。おろらくそんな理解です。ところがペテロが言うのです。あなたがたは神のひとり子を十字架につけて殺したのだ。ヨエルが預言したことはそのことであつた。

2) 主の名を呼ぶ者は救われる

ペテロは何のためにこんな厳しいことを言うのでしょうか。人を責めるためか。いいえ、そうではない。24節でこう続ける。「しかし神は、この方を死の苦しみから解き放って、よみがえらせました。この方が死につながれていることなど、ありえないからです。」

私たちの手によってつるされ、殺されたイエスが、そのまま墓に葬られたままであつたのなら、私たちには何の希望もなかったでしょう。神を殺したのですから、さばきを免れることはできない。ところが神はよみがえられました。それは何を意味するか。

例えば、事件や事故で息子を失った母親や父親のインタビューが新聞に載ったりテレビに映ることがあります。ある方はこう言います。「殺された息子を返して。死んだ娘を返して欲しい。」もちろん返すことができないことは誰でも知っています。返すことができないから、その代わりに、犯人に重い刑罰が科せられます。それがこの社会の仕組みとなっています。人間ができるのはそこまでです。

それがもし殺された息子、娘が生き返り、元どおりに返されるというのならということになるでしょう。私たちが神を殺した事実は変わらないとしても、重い刑罰を科せられないで済む可能性が出て来る。罪が赦される可能性が出て来る。でもどうやったら赦されるのか。

ヨエルが語りました。21節。「しかし、主の名を呼ぶ者は、みな救われる。」いったい、主の名を呼ぶとはどうすることなのか。

3) ペテロがたどった道

ペテロを見ればわかってきます。彼はかつて「イエスのためなら死んでもかまわない」と豪語していました。ところが、イエスが逮捕され、裁判にかけられたとき、手のひらを返すようにして、イエスを知らないとして三度証言して、逃げる。イエスが十字架にかけられ死のうとしておられたときも、怖くてどこかの家に隠れていた。そうやってペテロもイエスを十字架につけて殺した。

そのペテロがなぜ今ここに立つことができるのか。自分が何か人よりもすばらしい信仰者だと思っているから立っているのではない。よい人間だと思って立っているのではない。むしろ逆です。ペテロはほかの人に顔向けができないほど恥ずかしいことをしてしまった。あんなことをしてしまった自分でさえ、救われた。完全に罪を赦されたということを知っているから立っている。

でも、いったいどうやって救われたのでしょうか。彼は何かしたのか。聖書のどこを開いても、ペテロが罪赦されるために積極的に何かをしたという箇所は出て来ない。書いてあるのは、ただ一つだけ。三度イエスを否定し鶏が鳴いたときです。ルカの福音書 22

章 61, 62 節。「主が振り向いてペテロを見つめられた。ペテロは、『きょう、鶏が鳴くまでに、あなたは、三度わたしを知らないと言う』と言われた主のおことばを思い出した。彼は、外に出て、激しく泣いた。」

ペテロは、自分が取り返しのできない失敗をしてしまったことに気がつき、激しく泣きました。げんこつで自分の頭を殴りたいほどまったくふがない自分、情けない自分、どうしようもない愚か者、そんな自分のしたことをただ悲しむしかありません。

イエスはそんなペテロを見つめておられました。とがめるような厳しい視線でしょうか。むしろ逆でしょう。主はペテロの弱さをよく知っておられます。ペテロをいつくしみ、愛し続ける視線です。大丈夫、あなたはこれからイエスの復活の証人となるのだからと、励ましておられる視線です。その証拠に、この三日後によみがえられた主は、ペテロにそのお姿を示されたではないですか。

主の名を呼ぶ者。それは、「主よ。主よ。」と、機械的に呼ぶ者のことではありません。むしろ、「私は『主よ』と、呼ぶような資格のない愚かな者です」と自分の罪を悔いる者、悲しむ者、その者こそが「主の名を呼ぶ者と」言われ、救われる。それが聖書の約束なのだというのです。

ペテロは頭の知識で言っているのではない。イエスから直接に、このみことばが本当であることを教えてもらいました。だから力強く語る事ができるのです。ペテロは短い間にどうしてこんなに変わったのか。不思議に思いましたが、すべて主の取り扱いによる者であったことがこれでおわかりだと思います。

主を十字架につけた者をさえ愛し、造りか

えてくださる主の御名をあがめます。